

「いやだ。行きたくない」

駐車場の奥から、久しぶりに外に出そうとするとき、バイクはさつまつて外出を拒否した。ハンドルに手をかけ、後ろへ引き出そうとした体勢のまま、孝之はかちりと固まつた。

すでにシ字ロックは外していたし、キーも鍵穴に差し込んである。久しぶりなのでバッテリーが上がりつていなかと心配していたのだが、ライトは問題なく点いた。慎重にエンジンを回してやれば、すぐにでも走れる状態のはずだ。

もう一度、ハンドルに力をこめた。

「やだよ。外、出たくない」

引き出そうとする孝之に、バイクは再度、そう抗議した。

400ccの孝之のバイクは、重量もゆうに一百キロを超える。バイクを自転車の延長に捉えて、手で引き回せるものと思つてている友人は多いのだが、原付や小型ならともかくこのクラスになると取り回しは結構労働だ。この小さな月極駐車場から出すときも、孝之は腰に力を入れて踏ん張り、なんとかよろよろ引き出していく。

だから今日もそうした。
でもバイクときたらこうだ。
「やだよ、やめてよ」
もともと車体が重いといつて、そのうえいつも踏ん張られては、引いてもなかなか引き出せない。タイヤは回らず、抵抗するようになり、わずかにするとコンクリートの上を滑つた。孝之は腰から力を抜くと、ハンドルに手をかけたまま、視線を落とした。

「……なんだこりゃ」
「外になんか、行きたくないよ」
最後に仕舞つたときカバーをかけておいたから、田立つぼの汚れない。それでもブルーの車体には、細かな砂埃が積もつてしまつていた。とは言えそれは何も今回に限つたことではなく、以前から孝之がバイクを外に出すのは、数ヶ月に一度や二度、しかもほんのわずかな距離のことだつた。いつか整備してくれたバイク屋の店員は、それじゃバイクが可哀相だよと言つていたけれど、買ってみはしたもののがこれまでのめりこみはできなかつた孝之に、毎週のようにツーリ

ングにバイクを走らせているところ店員の気持ちはよくわからなかつた。

スタートスイッチを押してみる。

タンクの下でキュルルル、と音回りするような音がした。スイッチを離すと止まつてしまつ。さすがに長い間放つておきすぎたから、エンジンも軽快には始動しないのだ。ギアを二コートラルにしたまま、宥めなかすようにアクセルを少しづつ開いていった。なんとか、ブオン、と低い音を引き出す。

よし、いける。問題ない。

腰に力をいれ、

「いやだ。やめて。外で人に会つのは怖い。家にこよう」

「…………」

孝之はエンジンを切つた。

困つた。

考えてみれば、半年間も乗つていなかつたのだ。

どうやらしばらく外に出さない間に、こいつは対人恐怖症になつてしまつたらしい。

「……外、行きたくないのか？」

馬鹿馬鹿しいとは思いつつ、孝之は口を開いた。何処に喋りかけたものやらわからないので、なんとなくフロントライトに向かつて訊いてみる。

バイクは申し訳なさそうな聲音で、

「ごめんなさい。でも怖くて。ぼく、あとと上手く走れないよ」

「いやでも」と孝之は困つて腕組みをする。「まあ。大丈夫なんじゃないか。だって、ほら、バイクなんだから」

「でもぼく、あまり出来のいい方じゃないもの」

「出来」

「きっと沢山エンストしちゃうよ。そしたら道路の他のみんなに迷惑かけちゃうしや。駐車場にいた方がいいと思うんだよ」

「うーん、えつと」

途方に暮れて言葉を探していふつむかしい、ふと孝之は手を留めた。リアタイヤのホイールに、蜘蛛の巣が絡みついている。

さすがに少しバツが悪く、孝之は屈みこんで巣に手を伸ばした。小指の爪ほどの小さな蜘蛛が、音もなく動いて孝之に言つた。

「おまえのせいなんだからな。」
「おまえが、ちつとも外に出してやらなかつたせいだ。長じて世間の風に触れなかつたから、なんだなんだ。

「おまえが、ちつとも外に出してやらなかつたせいだ。長じて世間の風に触れなかつたから、
「いつ、すっかり臆病になつちまつたんだ」

「近頃は、蜘蛛まで喋るのか」

「喋りくらうらあ。なんだよ、その手。俺の家を取り払おうつてか。おまえのバイクの唯一の
話相手を、おまえ追つ払おうつてんだな

「な、なんだよ」

妙に威勢のいい蜘蛛だ。

「勝手に人のバイクに巣作つておいて、そういうの、ああいうんだぞ。えつと、盗人猛」「
「おまえこそよくそんなことが言えるもんだ。いいか？ 数日の間に作つて文句言われんならわ
かるぜ、納得する。でも半年間も放つておいて、今更そんなこと言われても困るぜ。人間だつて、
長年自分の土地を他人に無断で使われると、使つてる側に所有権とやらが移つちまうつて聞い
たぜ。知つてたか？」

「なんで蜘蛛が法律に詳しいんだよ

「時効取得と言つらしい。まああれば十年や二十年の話らしいがな。しかし俺は蜘蛛だから半年
でいいような気がする

「いや、よくない気がする」

「ずっとこいつを見もしてやらなかつた癖に。ライダーはもつと自分のバイクを可愛がるもんだ
が。」の冷徹バイク乗りめ。おまえが悪いんだ。全部、おまえが悪い。そうに違いない

そ、そうなのかな。

ちょっと自信がなくなつた孝之を底うように、バイクがハンドルをふるふると振つた。

「タカユキは悪くないよ。タカユキにはタカユキの生活があるんだから、ぼくにかかりつきりじ
やいられないもん。ただ、ぼく、少しだけ寂しくて、いつに話相手になつてもうつたりしてた
んだ。だから、追い払わないであげてくれないかな。……ごめん、タカユキ」

「謝ることないぜ！」
「今までちつともおまえのことなんか構つてくれやしなかつたじゃ
ねえか。何もやつてこなかつたくせに、都合のいいときだけおまえを使ってツーリング洒落込も
うだなんて、こんなバカな話はないぜ！」
「オモチャのつもりで買つたんだけどなあ」

やこのやこのと騒ぐ蜘蛛と、気弱に孝之を底うバイクの話を聞きながら、孝之はもつ一度眩い

た。

「……なんだこりや」

2

一年前、バイクを買おうと孝之が決めたとき、母の和恵は顔をあかられまじしかめて、「お願
いだから不良みたいなことはやめてちょうどいいよ」と言った。

そんな言葉を聞くことになると、予想してはいた。してはいたけれど、こぞ実際に聞かされて
みると、嫌な気分だった。

バイク雑誌に目を落としたまま、気に入った車種をチェックしていたペンを止め 止めた途
端に、久しぶりにはしゃいでいた気持ちが、穴の開いた風船から空気が抜けるようにふうふうと萎
んでいくのを感じた。窺うように、訊いた。

（なんで不良なのさ）

和恵は大仰に溜め息をついた。（なんでも何もないでしょ、あんなブンブン五月蠅いだけのも
の。足が欲しいならいつの車を使えばいいじゃな）の

（マフラーを変なのに付け替えなければ、それほど五月蠅くならないよ。それにお金のことは、
自分の金で買うから。大学、休みに入るから、バイトする）

（またそんなこと言つて。自分のお金つて言つたつて、『飯も』の家のローンも、大学の学費だ
つて、全部お父さんが稼いでるんですからね）

母のいつもの口上だ。自分の金で、自分の力で 息子のやうやう言葉を聞くといつも、彼の
人生が彼女の手のひらの上にあるのだということを、どうにか示そうとする。

一度目の国立大学の受験に失敗し、学費が倍もかかる三流私大に引っ掛けただけの孝之には
負い田がある。そう言われてしまつて、言葉に逆らう術がない。それでも、大学生にもなつて自
分が欲しいものも好きに買えないといつのは、あまりに恥ずかしい氣がする。

（バイクなんて危ないし、雨が降つたら乗れないでしょ。車検のお金だってかかるし、停める
場所だつてないじゃない。それでも乗りたいつて言つなら好きにしていいナビ、あとで後悔して
も知らないんだから）

この母は、小さな問題点を見つけ出しては積み上げていくのが得意だと、孝之は思つ。昔から、
孝之がしたいと言つたことに、頷いたことなど一度もない。

高校卒業後の進路選択のときもそうだった。自然と四年制大学に流れの周囲の中で、デザイン

をやりたくて美術の専門学校に行きたいと孝之が言つたときも、彼女は相手にしなかつた。周囲の流れに逆らつことは、誰でも通る道であり、誰もが後悔して引き返していく道であることを、滔々と説明してみせた。

そうして入った大学の中で、孝之の生活は酷く希薄だった。節田節田で目的地を設けてくれていた受験がなくなると、向かう方向もわからなくなる。自分のしたいことがなんのかもわからぬまま、ずるずると呼吸を続けていく生活。

（何処に行つたって不満くらいはあるでしょ。大学を辞めるつてこつても、わざわざ一度受かつたものを入りなおして、また思つてたといふと違つてみなさい。後悔するんだから）

何も何の考えもなしに飛び出していくといふわけではない。反発の思いで、きらりと調べることには調べた。情報を探るひきに嫌になるのが常だった。何処を見回しても立ち入り禁止の札が掲げられてくるような気がして怖気づき、進める道は結局今歩いているといふしかないのだと尻尾を巻く。そしてまた後悔する。じくじくと無力感に襲われる。

もう絶対辞めやると、まだやれるかもしないの間で浮き沈んでいく日々の繰り返し。夢なんか逃避なのかを推し量るだけの不毛な語らい。あやふやな見通しと、確かに費やした数年の時間。きっかけがどうしても掴めなかつた。それでも惰性でなく自分の足で歩いていく級友を見る

たび、自分で何かが腐つていくような気がした。

そんなだつたから、友達の250っこの後ろに乗つて走つたときは気分が良かつた。

ずっとこんな新鮮な空気を、肺の中に送り込んでいた気がして。

「好きにしていい」の言葉に従つて、孝之はバイトで金を溜めた。ここで好きにしなければ、そのうち好きにしていいと言われても何もできなくなる。

それでも夏休み中、朝から晚まで働いて得た紙幣の厚みを渡すとき、確かに孝之は思ったのだ。ほんとにこれでいいのかな、と。

バイクは手に入れた途端、指の間をするりと抜けて、月極駐車場で引き籠もりになつた。

引き籠もりになつたバイクは、対人恐怖症になつて、ホイールに蜘蛛の巣をつけたまま、外出拒否をしている。

散々罵倒してくれていた蜘蛛も、この点においては協力的で、「おまえだつてこのままじゃいけねえと思つてんだろう?」と熱い人情節でバイクを説得する。わけがわからない。

「でも、きっとみんな、ぼくを見てくすくす笑つんだよ。一ートバイクつて。……怖いよ」

「そんなことねえ。どうしておまえはそんなに自分に自信がねえんだ! このぶつとにタイヤ!

「凄いじゃねえか! 誰にも負けねえぜ!」

バイクは、うん、と頷きながらも小声で付け加える。「でも、そのぶん値段高いんだよ、ぼくのタイヤ……」

バイクを購入するとき、孝之が言つたことである。太いタイヤが格好いいよ、と勧める店員に、でも交換するとき値が張るのがなあ、とぼやいて返したのを覚えてる。その会話を聞いていたのだ、バイクは。聞いて、申し訳なく思つていたらしい。

これは厄介だ、と孝之は思つ。他にどんなことを言つたかな、と考える。考えるが、バイクに向かつて喋つたことなどないから思ひ出せない。ちくしょう面倒くさい。どうして喋りやがるんだこのバイクは。

携帯を取り出し、ヘルプをかけた。

「もしもし、木村? おまえさ、会社の同僚で、以前引き籠もりやつてたのがいるって前言つて

つてたじやん? どうやつて復帰したのかとか、知つてたら教えてくんない?」

なんだ、どうした突然? そんなこと訊いて。おまえ、ついに大学辞めちゃつたの? よしとけつてあんなに言つたのに。学生のつあだからこりこり思つんだらうけひれ、せつてえ後悔するつて

「違う違う。えつと……弟が、さ」

弟? おまえ弟なんていたつけ

「うん。で、半年も家に籠もつてたせいか、すっかり埃かぶつちまつて、外に出るのが怖いって言つんだよ。どうしてやつたらいいんだろ? って思つてた」

あー、そうだな。それならとつあえず外にでも連れ出してやつたら? えつと、弟、いくつだ? 中房?

「中房というか、中型かな」

中房か。いきなり学校とか連れていこうとする嫌がるだらうから、どうか近場で連れ出してやんな。自然があつて空氣のいいことか、いいんじゃね? おまえバイク持つてたよな。タンデムでツーリングにでも連れてつてやつたりどうよ

「あー」

タンデム=二人乗り。二ヶツともいつ。

バイクを、別のバイクの後部座席に乗せて、タンデム走行する光景を想像してみた。

「……ちょっときついな。いろんな意味で」

「そうか？ 弟、バイク嫌いなの？」

「そんなことはないと思うけど。やっぱり、人間よりは、同じバイクの方が好きなんじゃないかと思つ」

人間よりもバイクが好きなのか？

声は少し考えて、神妙に、それは重症かもな

「というか、走ることよりも、エンストして他人に怒られるのを怖がつてゐみたいなんだ」

おまえそんなに運転下手なのか？ まあ、とにかく身だしなみを整えてやつて、軽くどつかに連れ出してやつたら？

アドバイスを受け、まずは洗車をしてしまつことにした。どちらにしろ、事前に綺麗にしておかなければと思っていたのだ。

バイクをなんとか家の前の道路まで引っ張つてくると、バケツに洗剤を用意した。シャワーを勢いよくかけて、泡立てたスポンジでくまなく車体を洗つてやる。バイクは気持ち良さそうに、

サイドスタンドに身を預けている。水の零がぽたぽたと滴る。

バイクのたつての願いによつて、蜘蛛の巣は残して洗車するはめになつた。リアホイールについた小さな蜘蛛の巣。その上を蜘蛛は水滴を嫌がつて、もぞもぞと動き回りながら、

「気が利かねえ奴だなあ。洗車のときは、どこか痒いところありますか、くらい訊くもんじゃねえのかよ」

減らず口を叩く。大きなお世話を。

洗車を終え、ウェスで水滴を拭き取つてやると、みちがえた。埃で曇つていたブルーの車体が、ぴかぴかと太陽の光を受けて輝く。

バイクもすつきりした様子で、再びエンジンをかけてやると、ブルルル、としつかりした音で応えた。

「冷たかつたけど、なんだかさつぱりした気分」

「行けそうか？」

逡巡してから、バイクは答えた。「うん、がんばるよ」自分の中のエンジンに、言い聞かせるような口調だつた。

「タカユキ、何処行きたいの？」

なんとなく、口にすることが躊躇われた。

無意識にジャンパーのポケットにやつっていた手を出し、両手をあげて肩を竦める。

「特に決めてないんだ。買い物がてら、適当に走ろうかと思つてた」

「買い物つて、何処に行くの？」

「とりあえずショッピングモールとか、でっかいところがいいな。大学辞めて、就職して寮に移るんだよ。いろいろ物入りなんだ」

今まで用心して誰にも喋らないようにしていたのに、つい口を滑らせてそう言つた。

母に報告してもいいやと思ったのか、おどおどしたバイクの態度にこいつなら偉そつて否定しないはずだと気を緩めたのか。自分でもわからない。

「タカユキ、就職するんだ」案の定、バイクの言葉には何の含みもなかつた。「す」「いなあ

「別に凄くなんかねえよ」言わなければいけない義務のような気持ちで、「就職についても、バイクよりは上つてくら」の位置だし」

「ふうん」

「それで、家を出るから、最低限必要なものの準備をしなくちゃいけないんだ」

「でもぼく、あまり荷物は積めないよ。車の奴みたいに沢山物は持てない」

「今日は下調べに行くだけだから大丈夫。できるだけ安いもので揃えないと、資金が少ないからさ。いくつか見て回るつもり」

「ふうん……」

「じゃあ、行こうか。……平氣だよな？」

バイクはぴかりとパッシングで答えた。孝之は頷くと、サイドスタンドを收め、シートに跨つた。車体全体がぶるぶると小刻みに震えているのがわかる。タンクを挟んだ腿の間から、緊張がこちらにまで伝わってくる。「へ、うまく走れるかな……」

ハンドルに手をかけ、クラッチを切つた。エンジンレバーを踏み込みローに入れると、ゆっくりとアクセルを回していく。

ギュルルル、とバイクの中で音が渦巻く。一千回転。三千回転。エンジンの唸り声が大きくなり、バイクがその音に自分でびびつてハンドルを振る。「ね、ねえ、大丈夫？ 大丈夫？」

握っていたクラッチレバーを、徐々に離していく。エンジンの動力を車輪に伝える。繋がるときに一瞬だけ、ふわっと宙に浮くような感覚がした。教習所ではそれに戸惑つて、随分エンストしたものだ。さすがに今は大丈夫。ゆっくりと左手を開いていった。

人生もそんな風にいけばいいのに、と孝之は思つ。自分は決意を身体に繋げるときの空白に、

いつも不安になつて逃げてばかりいる。あと少しアクセルを回すことができれば、その先に向かうことだつてできたかもしないのに。自分は大学に入ったときに、Hレストしたままだ。

やりなおそうと思つたことは幾らもある。受け入れて今の生活に気力を燃やそうとしたことだつて沢山あつた。でもどうしても行動に繋ぐことができずに、繋いだり切つたりを繰り返すつち、すっかり心が錆つてしまつた。そして走るつとすること自体やめてしまつた。

「これは最後のチャンスなのだ。だから絶対、退いちゃいけない。なんと言われようと。

アクセルをさら回すと、ほんのわずかな躊躇いのあと、バイクはおつかなびくつタイヤを転がし始めた。ようよと走り始めたが、徐々にスピードに乗つていくと安定する。

「なんだい、走れるじゃん」

「う、うん……。大丈夫そう」

閉じ籠もつてばかりいたら、気弱にもなる。走り始めたら案外大丈夫なものだ。だから、少しくらい無理をしてでも走らなきゃいけない。

ギアを上げながら、こいつは大丈夫そうだな、と思つた。対人恐怖症といつたって、なんてことない。

ちえ、単純にできてやがるんだ。

大丈夫、やれそだという気分が、湧き上がつては萎んでいくものだということを孝之はきちんと知つていた。頑張ろうといつ思いだけを燃料に進むには、目の前の世界は広すぎるから。知つていたけれど、相手はバイクだ。

人間と違つて、バイクの悩みなんて、簡単なもんだ。そつだらつ？

4

「ふすんふすんふるるるるるがくんがくつ。

エンスト。

甘かつた。

「じ、じめんつ」

青に変わつた信号を前に、バイクは慌てふためいた。

歩行者信号の方を向き、点滅をじつと確認して、目の前の信号が青に変わつたらすぐに飛び出せるよう身構えてじるようだつたのだが、ちょっと構えすぎだつて思つて、矢先だつた。意識しそぎたのだ。自然にやればいいのに。

スタートスイッチを押して再始動させた。今度は上手くやれよ、と胸中で呼びかける。これじゃオレがエンストさせたみたいじゃないか。

後ろの車が、クラクションを一回鳴らした。

音に追いたてられるように、バイクのメーカーが一気にぶおんと上がった。馬鹿、ふかし過ぎだ。そのままクラッチに繋がり、エンジンがぐがくつとまたおかしな音をたてた。待つて、待つてとバイクは半泣き。

苛立たしげに、またクラクションが鳴った。

ヘルメットの中で溜め息をつき、孝之はバイクを降りた。バイクを押して道路の端に退けた途端、すぐ脇をかすめるようにして後続車が走り抜けていく。運転席に座った男が、睨むような視線を置き残していった。

苛ついてるのはオレの方だよ。

「じめんタカユキ……」

「四回目だ」

「じめん。急がなきや、って思うと、自分が何やつてるかわからなくなっちゃうんだ……」

普通に道を走つているときはいい。前に車がいる場合は、問題なく走行できている。ついていく

くのはできるのだ。

だが信号待ちから発進するとき、特に自分が先頭のとき、バイクはきまつてエンストを続けていた。そうして後続車両からブーイングを喰らい、恥をかくのは孝之だ。

「まったく、なんで信号駄目かな……」

「焦っちゃうんだ、早く行かないとって。ぼくの速度が遅かつたら後ろの奴らがイライラするだろうなって思うと、緊張しちゃうんだ」

「それでエンストしてたら世話ないだろうが」

「どつもこのバイクは、他人（他車？）のことを気にしそぎるらしい。みんなに迷惑をかけないよ」と、苛々させないよう^元バイクにあるまじき、随分窮屈な走り方をしている。

「いいじやねーかい。どんどんエンストしちまえ」蜘蛛が無責任なことを言つ。「何が道路だ。人間だけのもんじやねー。いつもいつもスムーズに進めると思つたら大間違いだぜえって、示してやるーつてもんじやあねえの」

「おまえは黙つてろ」

「なんだこの、人間がよう。一人で家も作れねえ半人前が俺様に指図だつてえ

「いくぞ」

幹線道路を走る間、なるべく信号に捕まらないよう祈つた。右左折するときは早いうちに言つてね、心構えがあるから と、いうバイクの願いに応え、ワインカーを出す前にハンドルを叩き、曲がるぞ、と知らせてやることにした。心構えもクソも、ワインカー出して車線変更するだけだろと思うが、バイクいわく「割り込むタイミングが難しい」らしい。割り込む、なんて表現を使つあたり、こいつは車線変更にまで後続車の顔色を窺うつもららしい。これは既に強迫観念だろうか。そこまで気弱なことでどうすると思う。日本の道路社会を渡つていけんぞ。

なんとか辿り着いた街道沿いのショッピングモールで、孝之はフロアを駆け回つた。最低価格の値段を確認して、用意しておいたメモに書き込んでいく。一つ書き込むたびに、溜め息が一緒に出て出た。予算が自分の銀行口座分しかない以上、引越し資金も考えれば最低限のものしか買はう餘裕はないだろうと覚悟はしていたが、それすら危うい。

ジャンパーのポケットに手を突つ込み、折り畳んで仕舞いこんでいたチラシを探つた。また溜め息が出た。

一度就職先のオーナーに見せてもらつた寮は、壁紙に染みが浮いていて、家具も潔いほどに何もついていなかつた。当面、不便な生活にはなるが仕方ないと腹を括つたのだ。経験もなく、大学も途中退学になる そんな立場で雇つてもらつ以上、苦労は覚悟しなければいけない。

孝之が就職を決めたのは、友人の細いツテを手繕つた果てにあつた、小さなデザイン事務所だつた。大学の疎らな授業の合間に縫つて始めたささやかな就職活動も、その頃になると、どこか諦めも感じ始めていた。面接で事情を打ち明けるとき、黙つて話を聞いてくれるオーナーの前で、孝之はどこかで、でもやっぱり駄目だらうな、と思つていたのだ。

だから、一緒に働きましょうという返事を貰つたときは、喜びよりも戸惑いが先に立つた。数日経つても実感が掴めずになつた。それは誰にも相談をしなかつたからかもしれない。会話の中で自分を確認する機会がないから、こつまで経つてもふわふわしたままなのだ。

で、やつと打ち明けたらこつちやうんだよな。

店の中をぶらぶらと歩き回しながら、そのことを思つと氣分が重くなつた。

事後承諾の形で報告する孝之を、和恵は泣きながら詰つた。いたたまれなくなつて、飛び出しつてきたのだ。

仕方ないじゃないか。先に打ち明けていたら、今までの繰り返しだ。すっかり事が動き始めて、自分でも止められないところまで行き着くまでは、ブレーキなどかけられなかつた。

「もういいの？ じゃ、帰るんだね？」

帰り道はずつと、どうやって話に折り合つをつけていくべきか、考えていた。どうやつたら母

を納得させられるだろ。自分のもやもやをわかつてもうたるのだろか。

交差点の向こうにバイク屋が見えた。何年か前に、こいつを買った店だ。わずかに見据え、脇を通り過ぎた。今日はいいやと思つた。また考えよ。

「またね、タカユキ。今日は楽しかった」

月極駐車場の奥に停められたバイクは、疲れているようだが、どこかせつぱつした声を出した。埃をかぶつていじけているよ。踏み出して満足した奴は、わざとそういう声を出す。

「ちゅくちゅく、色々連れてこになるけど、いいか?」

「うん。ぼくも頑張るよ。頑張つて、タカユキに迷惑かけないように走れるようになる

「ん」

少し、嬉しかつた。バイクの機嫌をとつて喜んでいてどうするんだといつもするが、元気づけることができて嬉しい気持ちは、相手が人間だらうとバイクだらうと変わらない。

いい気分で家の玄関を開けた。

途端、気持ちはさつと吹き飛ぶ。リビングに通じるドアの向こうから、錐のようについた声が漏れて聞こえた。電話をしている。母の声だった。

「なんのために産んだと思つてるのよ。あまりに勝手じやない」

孝之は一階に上がって自分の部屋に入ると、思い切り音を立ててドアを閉めた。心中で、わからあおうとこつ氣持ちは叩きつけられて閉じた。

自分で再確認した。絶対、決意を曲げないと。怒りは決意を固着する。あんな人のことなんて、もう気にするもんか。

翌日は、早くから起き出して家を出た。外へ出ると、昇りかけの朝日に思わず目を閉めた。音を立てないように玄関を閉めながら、家出みたいだなと思った。それくらい、すべきなのかもしない、とも。

新聞屋の小型バイクたちが、家のポストとポストの間を忙しく駆け回つてゐる。小さい奴らがもう起きて働いてゐるのに、駐車場で孝之のバイクは、タンクを一、三度叩いてやるまで目を覚まさなかつた。今日は蜘蛛の姿もない。

やつと起きたバイクは、言い訳がましく、「昨日は少し疲れちゃつたんだ」

まったく。たいした距離走つたわけでもないだろ。」

「今日は何処行くの？」

エンジンをかけると、ゆっくりと走り出しながらバイクが訊いた。孝之は肩を竦めた。

「決めてない。どこかぶらつと走るつもり」

「そういえば、大学はいいの？ 今日は平日だけ？」

「いいんだ。どうせ辞めるんだし、行つても仕方ないだろ。今日はほどつかツーリングしてすつきりしてさ。帰りは友達の家にでも寄りたいな。家に帰りたくない」

「何があったの？」

道路の向こうで信号が黄色に変わり、バイクがぶるつと緊張した。後続車を窺い、孝之を窺つ。赤に変わった。一瞬の間の後、ブレーキがかかる。気にせず走り抜けばいいのに。それか、もつと早く止まれよ。急いでないよ。誰も責めないから。

「めんどバイクが呟いた。

「別に」

「え？」

「大したじじやない。大学辞める辞めないの」と、母親と揉めたつてだけ

「ああ……」母がいつたようだつた。「タカユキ、お母さんとあまり意見が合わないものね」

「なんでバイクがそんなこと知ってるんだよ」

「だつてタカユキがぼくを買つてくれたときのこと覚えてるもん。納車の日だよ。トライックに揺られて、ぼくが家まで来たらね、タカユキはワクワクした顔してたけど、玄関から出てきたお母さん、眉顰めてたから。こんなものに乗るの、って」

「バイクイコール不良の乗り物なんて思つてんだよ、あの人は。世間の言つことなんでも真に受けさ。自分の頭で考えられないんだ」

「違うよ。危ない、って思つてたんだ。事故を起こしたらタカユキが死んじやうつて思つてたんだ。だからぼくのこと嫌いなんだよ。タカユキを危険な目に遭わせるから、ぼくのこと嫌いなんだ。だから好きなタカユキが、嫌いなぼくと一緒にいる、嫌なんだよ」

信号が青に変わつた。バイクが、運動会で徒競走を走る小学生みたいな息をついた。位置について。用意。

慎重にクラッチを繋いでやると、ゆっくりと走り出す。がくがくと車体が小刻みに震えて止まるかと思ったが、エンストはしなかつた。

「嫌われちやうのは嫌なんだけど」アクセルを回して後続車を引き離してやると、バイクはほつとした様子で、「でもお母さんに嫌われてるつてわかつても、嫌な気はしなかつたよ。お母さん

の気持ち、わかつたから」

何故だか、いらっしゃった。今は和恵を擁護するような言葉など聞きたくなかった。

「それにタカユキがワクワクしてくれたから、気にならなかつたんだ、お母さんに嫌われちゃつても。嬉しかつたんだよ。ぼく、お店では、おまえみたいに小心者じやバイクとしてやつてくのは無理だつてよく言われてたから。きっとこのまま廃車になつちやうんだつていつも思つた」

「んなこと気にしなくたつて、バイクの性格なんて、密にはわかんないだろうが」

「それでもないよ。なんとなく、伝わつちやうものなんだ。みんな、ぼくのエンジンを吹かしても、なにか物足りなさうな顔をするんだよ。だからタカユキがぼくを選んでくれたときは、凄いじきじきして緊張した。嬉しかつたんだ。ぼくもやつと選ばれたんだなつて思つた」

他と比べて安かつたから買つただけだ。バイクを何台も乗りこなすようになつてみると、あるいはどんな性格をしているかわかるものなかもしれないが、孝之がバイクに触れたことのあるのは、友人のものと教習所のものだけだつたから。

売れないバイクを捌くのに、孝之は格好の密だつたことだらう。バイクについて詳しいわけでもないし、学生で金もない。ちょっと値段を下げるやうにすれば、対人恐怖症気味なバイクで

も喜んで買つていいく。

得意客だつたら、勧められなかつたわけか。馬鹿みたいだと思つた。頑張つて働いて。大金払つて。

「どうしたの？」

バイクが不安そうな声を出した。

顔色を窺うよつた様子にいい加減うんざりして、思わず溜め息が漏れた。

海沿いの道路をすいぶん走つたが、世のバイク乗り達が楽しそうに語る、ツーリングの開放感はあまりなかつた。バイクが周りの車を気にしすぎるからだ。それが気になつて、孝之も景色を楽しめない。

ちよろちよろしやがつてと四輪に疎まれ、バイクは隅へと寄つてしまつ。やんちゃな他の二輪にスピード勝負を挑まれるたび断つて、白けた様子で相手が離れていくたびに、バイクは口数少なくなつていつた。文句すら言わずにいちいち落ち込むバイクの様子を見ていると、どんどん苛立ちが溜まつていつた。自分を見ているようで。

陽が暮れて、徒労感を感じながら帰路についた。家に戻る気分になれず、泊めてもらえないかと昔の友人に電話をかけた。

間延びした調子で理由を訊ねる友人の声が、妙に遠く感じた。

まあまあ、俺も以前は、色々手指してたもんだよ

それだけ聞くと、出しかけていた言葉を巧みに口を塞せ、わざと話をまとめて電話を切った。

不意に悲しくなった。

自分一人だけ、みんなからおこづきばかりを食らっていのよつたな気がした。

「ねえタカユキ」

他の友人に電話をかける気にもならなくなり、自宅に向けて走つていふと、赤信号でバイクが

眩いた。「やつぱり、後悔してん?」

「……なにが」

「ぼくを賣つた」と

「なんだよ急に」

「急じゃないんだ。前から思つてた。タカユキ、賣つた初めのうちしかぼくに乗らなかつたから、きっと衝動買いしちやつて後悔してるんだろうなって」

「悪かったと思つてるよ。放つておいて」

「責めてるんじゃないんだ。ただ、こんなつまらじやなかつたつて思つてるんじゃないかなつて

「氣になるんだよ。……わかつてるんだ。ぼく、別にタカユキに選ばれたわけじゃないってことくらい。安かつたから、タカユキはなんとなく選んだだけだもの。それくらいわかつてるんだ。現実くらい、きちんと見てるつもり」

信号が青に変わつた。

アクセルを回すとエンジン音が、居心地の悪い沈黙を少しだけかき消した。

「それでも、だからこそ、タカユキに氣に入つてもらわなきやつて思つたんだ。タカユキを後悔させたくないって。でも、やつぱり、ぼくじや無理なのかもしれない。あのときのタカユキのワクワクした顔、ずっと続くよつにできたらなあつて思つてた。でもそれに、きっと、ぼくじやだめなんだ。そうだよね」

「いや」と、こちらは言葉を断ち切るしかない。「別に後悔なんとしてしない」とくらべわかるだり

バイクは不思議に訊いた。「まさかとう?」

窺うような様子にこじらつとし、「……本当だろ? 本当じやなかつ?」と、答へが同じだつてこ

バイクははつとしたよつて口を噤んだ。

バイクははつとしたよつて口を噤んだ。

「たとえ後悔してたとたつて、過去は変えられないんだから。それならうだうだ言つても仕方ない。」これからを良くしていくしかないだろ。だからオレは頑張つてるんだ。頑張つてるつもりなんだよ」これでも、ぐちぐち言つたまま過「」していくなんてうんざりだから、なんとかしようと思つてる。本當か嘘かなんて訊かれても困る。訊く方は樂になるかもしれないけどな

「ごめん。タカユキ、ごめん……」

「いちいち謝るな、うざつてえ」

一度喉を通りつて外へ出た苟立ちは、なかなか収まらなかつた。長い間ずっと胸の中で回つていた黒いオイルが漏れる。バイクへ向けるべきじゃないとわかつてゐるのに。

無言のまま駐車場へ着いた。奥のいつもの駐車スペースに停める。

歩き出した背中に声がかかつた。

「もしぼくよりいいバイクが手に入つたら、タカユキは嬉しいかな」

無視して帰路についた。そんなことはないとバイクを慰めていられる余裕が、今はなかつた。玄関を開け、靴を脱いでいると、リビングから和恵の声が漏れてくるのが耳に入つた。内容までは聞き取れない。そのまま上がり框に足をかけ、階段に向かつた。

「ええ。なかつたことにさせてください」

リビングの前を通り過ぎるとき、早口の声が聞こえた。

はつとした。階段に足をかけたまま、耳を澄ませた。

「うちの方もまつたく話を聞いていなかつた状態で、戸惑つてゐる」とは「」承知ください

思わずカバンに手をかけた。事務所のオーナーから渡された名刺は、財布の中に入つてゐる。携帯電話も持つて出た。

以前、事務所の連絡先をホームページからプリントアウトした紙だけ、自分の部屋の抽斗に仕舞つてあるはずだつた。

その紙が今、電話機の横に広げられていた。

「ええ。ええ。すみませんが。はい。いざれお詫びに伺いますので」

ドアを開けると、彼女は受話器を抱えたままちらりと孝之を見て、背中を向けた。

「……なにやつてるんだよ?」

「それでは失礼します」

「ピ」と通話を切る電子音が、頭の奥で大きく響いた。

孝之は口を開き、言葉を出そつとして失敗した。言葉と、ずっと押し込めてきた荒々しい塊

が、喉元で詰まつて頭が白くなつた。

リビングを飛び出し、携帯を取り出す。

ちょっと、親御さんと見解の不一致があるよつだね
オーナーの溜め息混じりの声が聞こえる。孝太はうなだれた。

うちは別に気にしてないんだけどねえ。ただうかとのことで君の家の関係がぎくしゃくしてしまつのは良くないね。こちらとしては君の意思を尊重したいとは思うんだが、まあ、親御さんの気持ちを無視するわけにはいかないし。どうかな、もう一度きちんと話し合つてみて、それから考えてみたら?

「話なら何度かしたんだ。でもずっとあの調子だから。いつのことは別にいいんです。オレ、どうせ家出のつもりですし」

君が良くてもなあ 面倒くわざうな声が聞こえた。正直、困るわけだよ。つちも忙しいから、社員のコタガタに関わつている暇までないんだよね

……
よく働いてくれそなだからOKにしたけど、そんな問題があるとはいつも知らなかつたわけでしょ。君が真剣だつていうのはわかつてゐるけど、いつも仕事だからね。どうだろ、もう一度

よく考えてみるとこゝのは。それからでも遅くないと思つよ

じゃあ、と逃げるよつに電話は切れた。電子音が耳に残つた。

携帯を握り締めたまま、孝太はしばらく呆然としていた。電話をかける直前まであつた希望が、砕けてあたりに散らばつてゐる。力が抜けて、階段に座り込んだ。

ショックだつた。同時に、あたりまえだ、とも思った。いいんだよ、といつ言葉をどこかで期待していたのだろうか。親御さんのことなんて気にするな、といつ言葉をかけてもらつたとしても。一緒に働きましょうと言われたときに、自分が認めてもらつたと思い違いをしていたのだろうか。それは労働力としてであつて、面倒ごとと天秤にかければ、軽く浮いてしまつほどの些細なものでしかないのに。

もちろん、そんなこと、わかつてゐた。いや、わかつていなければならないと想つていて。それでもどこかで幼稚な思いに手を伸ばしてゐた自分に気が付いて、まるですべてを投げ捨ててやりたい衝動に駆られた。

家を出て、駐車場へ向かつた。無性に走りたくてたまらなかつた。暴走するような走り方をする奴らを、ガキだと笑つたことがある。今はメーターを振り切つても走りたい気分だつた。

「よつ。なんだ、シケた面してゐるな」

駐車場に差し掛かると、蜘蛛が声をかけてきた。見上げると、ジリジリと明滅する螢光灯に張つた細い巣から、一本糸を垂らしてその先で揺れている。孝之は無視して奥へ向かった。

いつも停めていたスペースの前まできて、初めて気付いた。

「あいつなら、いねえぜ」

蜘蛛が溜め息をつくのが聞こえた。

「さつき、出てつちまつたぜ。引き止めてんの、聞きもせずにな。おまえ、停めた後にちゃんとH字ロック掛けなかつたらう。駄目だぜ。盗つてくださいつて言つてゐるよくなもんだ。ハンドルロックなんて泥棒にとつちや、あつてねえよくなもんなんだから」

唖然とした。

ぱっかりと空いた駐車スペースを見て、それから蜘蛛を見上げた。「……盗まれた？」

「違う。出てつたつて言つたらうが。家出だよ家出。おまえ、何か酷いことでも言つたんじやねえか？」

「家出……？」

「何か思いつめた様子でよ。氣になつて、どうしたんだようつて訊いてたんだが、だんまりで。

突然、今まで話相手になつてくれてありがとうつて言つて、そのまま切り返してどつか行つてしま

つたよ」

地面上に田をやつた。アスファルトの上に微かに残つた太いタイヤの痕は、入り口付近に達するところでもう見えなくなつていた。

孝之は立ち去くした。わけがわからなかつた。

バイクのくせになんて勝手に家出なんかするんだ。

「結局、最後まで何も話してくれない奴だつたなあ。俺の家も持つていつちまつて。また家作り、面倒なんだがなあ。これ、借家なんだよ」

「 なんで」

「あ？」

「 なんで、家出なんか」

「そりゃあ、持ち主様のことが、嫌になつたんじやねえの？」

「…………」

振り向くと、蜘蛛は意地の悪い声で続けた。「からつと聞いただけだから知らねえけど、さつきあいつに文句言つてたう？ いつもは放つておかれで、おまえの都合のいいときだけ走らされて、上手くやれなきや怒られて。嫌なるだろ。実際

駐車するとき、バイクに投げた言葉のことを思い返した。そんなに酷い言葉だったのうか。言つべきではないと思つたのは事実だ。でも一つ言葉を滑らせた途端に、こいつやって出て行かれてしまうものなのか。

ぐつたりした。

バイクの機嫌をとつて喜んでいた自分が、酷く虚しかつた。

「なんのために買つたと思つてるんだよ……」

「あのう」

不意に、まったく別の声が聞こえた。

顔を振り向けたが、誰もいない。

いや、人がいないだけだ。バイクは沢山いる。

「あなた、タカユキさん、ですか？」

すらりと並んだバイクの群れを見回していると、すぐ近くに停めてあつたスクーターが、こいつちこつちとハンドルを左右に振つた。

前輪に三つ、後輪に一つ、太いチェーンロックがかけてある。大型スクーターだ。

「お預かりしている物があるんです」スクーターが言つた。

「……お預かり？」

「奥にいらした、ブルーのバイクさんから。あなたのバイクさんですよね？」

よくわからないまま頷くと、受け取つてください、とスクーターはぱかりと座席のシートを開いた。

中は大きめの荷物入れになつていて、スクータータイプだからか、容量が大きい。こいつの主人のものだらう、剥げ欠けたヘルメットや錆取りシンナーの缶が詰められている。

一番上に、見覚えのある包みが乗つていた。メンテナンス用の説明書や、任意や自賠責の保険証書一式を、雨に濡れないようにビニールの包みに入れて、バイクの座席の下に仕舞つておいたものだ。

「これ……？」

包みを持つたまま、戸惑つてスクーターを見下ろした。

スクーターはぱたんと座席のシートを閉めると、確かに渡しましたからね、と慎重に元の姿勢に戻つた。

「言つておきますが」とまたこちりに前輪を向けた。「こ字ロック掛けたから駄目ですよ

「……は？」

「大抵、盗難保障は、ハンドルロックとホイールロックが両方されていたときじゃないと認められないんです。J字掛けなかつたら、注意が足りませんでしたね、で終わりです。それだけ私達、盗難多いんですから」

「家出特約はねえしなあ」蜘蛛が口を挟んだ。「それにもともと、盗難保障は付けてなかつたんじゃねえのかあ」

「そうですか。まだ綺麗なバイクさんだつたから、付けているかなと思いましたが。買つたばかりのバイクには、付ける人多いです」

「買つたばかりつてんではないぜ。綺麗なのは、単に乗つてやつてないからよう」

「なるほど、そうですか。まあ私なんかはもう型落ちの老バイクですし、このとおりガリガリと傷だらけなので盗難保障なんて付けられてませんが。代わりに、盗まれなによつワイヤーロックの数が凄いことに。拘束されすぎです。まるでマゾのよう」

「ちょ、ちょっと待つて」

孝之が制止すると、スクーターは、はい？ と生真面目に応えた。

蜘蛛と顔を見合せせるよつてして、ああ、と言つた。前輪が小さくぐりぐりと動いた。

「つまり、バイクの家出というのはたまにあることなんですが、人間の皆さんは盗難されたと認識されることが多いんですね。で、そういうとき、保険に盗難保障が付いていればお金が下りることもあるんですが、保険会社の方も商売ですから、条件があつてなかなか難しいですね、と、まあそういう話で」

「そういう話で、じゃねえよ。なんだよ。わけわからんねえよ。どうからどうこう話が出てきたんだよ」

「訊かれたんですよ。僕がいなくなつたり、盗難と思われて、持ち主にお金が入るんだよね、つて。あなたのバイクさんに」

「…………」

「それで、タカコキは座席の下に保険証書入れてるから、それ」といなくなつたら保険会社に連絡もできなくなるつておつしゃこまして。証書をタカコキに渡してと、そう言われたわけです。

「ユーシー？」

思わず、手に持つた包みを見下ろした。

「保険金をオレに残そうとして？」

「でも、それって」

「もちろん私も、これは良くないぞ、と思いましたよ。彼、思いつめているようでしたしね。引き止めようと、件のロックの条件などお話ししたり、そもそも盗難保障が付けられていないかもしない、と諭したりしてみまして。どうやら彼、自分が車両保険に入れられてることは知っていたようなんですが、それで盗難も保障されるものと思っていたようです。事故のときに壊れた車の代金が補償されるのが車両保険で、盗まれたときに代金が補償されるのが盗難保障。四輪さんたちの場合、車両保険に盗難保障が一緒に含まれていることが多いんですけどね。私たちバイクに関しては、車両保険と盗難保障が別々になっていることが多いんです。盗難が多くて、保険会社も元が取れないのでしょうか？」

孝之はビニールの口を開けて、保険証書を引っ張り出した。

車両保険には加入している。初めてのバイクだったし、運転に自信もなかったから、事故が怖くてかけておひつと思ったのだ。だが盗難保障については、一気に値段が跳ね上がるのをつけなかつた。

ビニールを探るつちに、ふと気付いた。

「自賠責の証書がない」

「車検証もないはずです。盗難保障が駄目だと知つて、今度はたぶん、売りに行つたんでしょう」

「売りについて、何を」

「自分を」

「自分について」

頭がくらくらした。

「……バイクの中古屋に？」

「ほとんど走っていないようだし、結構な値段にはなると思うのですが……向こうにも商売ですかねえ、買い叩かれないといいんです。無理でしちゃねえ。気弱そうでしたからねえ」

「自己主張の苦手な奴だったからなあ」蜘蛛が唸つた。

「おまえら、そんな香氣なこと言つてる場合じゃねえだろ。何処のバイク屋だ？」

「さあ、そこまでは」

「知らね」

「なんだよ蜘蛛。おまえあいつの友達なんだろ？ どうしてそんなに冷たいんだよ」

「おまえにそぞつしてそんなに焦つてるんだ」

「どうしてつて、そりゃあ」

「いいじゃねえか別に。どうせ売るつもりだつたんだろ？ ポケットの中に、中古買取の折り込

みチラシだつて入つてたじやねえか。自分で売られよつていつてんだから、構わないんじやねえのか」「…………」「…………

口を開けたが、喉の奥に上つた言葉が、ぴたつと動きを止めたまま出てこなかつた。

「なんだよ？ 気付いてねえとでも思つてたのかよ、おめでたい奴だな。半年も放つておいたのに突然出して、どうしたんだつて思うの当然だらうがよ。自活の資金に困つてることと合わせれば、それくらい気が付いて当たり前なんだよ」

「…………あいつは？」

「もちろん気付いてたよ」

「…………

「確かにあいつは乗り物で、おまえにひとつちゃただの道具だ。でもあいつにはおまえしかいなかつたからな。いつもおまえのこと窺つて、顔色見て、それしかできねえ奴だつたんだ。売られるときには高く売られなくちゃって、ヒンストしねえように気張つてたんだよ。薄汚れたままだと高く売れないからって、でも洗車したときにオイル垂らして泣いてたの、おまえ気付かなかつたじやねえか。なんで俺が気付いておまえが気付かねえんだ。なあ、今頃、心配してどうするつて

んだよ。遅えんだよ」

ジャンパーのポケットから、チラシをそつと抜き出した。

折り畳まれたのを広げると、高価買取の白抜き文字と電話番号が覗いた。

ああ、あんたのバイク？ 来たよ、ついさつき。買に取つてもらえないかつて

電話越しに、店員の声は面倒くさそうに答えた。

でも悪いけど、お断りさせて頂いたよ。書類は揃つてたんだが、ライダー同伴でない場合の売却は、あとあとトラブルになることが多いんで断つてるんだ。やっぱり、知らされてなかつたわけか。困るんだよね。身内の問題は身内で解決してもらわないと

「あいつ、何処行きました？ 何か言つてなかつたですか？」

さあ、何処行つたまでは知りませんね。ああ、何か言つてたつてことなり、自分に車両保険がきちんととかかつてるかどうかつて、訊かれたけどね

「車両保険……」

知らないうつて言つたら、有効期限と一緒に調べてくれないかときた。困つたんだけど、教えたないと帰つてくれそうもないから、ええ、調べましたよ。あと半年くらい有効になつてたけど

「いけない」聞き耳を立てていたスクーターがウインカーをカチカチさせた。

「あんのバカヤロウ、思いつめやがって……」蜘蛛がぎりぎりと殴る。

孝之は田をしばたたいた。

馬鹿らしい考えが頭の中を駆け回つたが、それ以外思いつかない。人間での話だつたら珍しくもないコースだが、まさか。

「ぼつりと、口元した。

「車両保険金田当たるに、わざと……？」

「事故を起こすんです」

「あいつ、死ぬつもりだ」

スクーターと蜘蛛が、一緒に答えた。

6

今回限りですからね、とスクーターは繩抜けならぬワイヤーロック抜けを果たして、孝之をシートに乗せてくれた。キーを挿してもいらないのにエンジンがかかる。「うやつてたまに、」主に内緒で散歩に行くんです」

「行き先の見当はついてんのかよ?」

後部シートに蜘蛛が這い上がるのを確認するや、アクセルを捻った。シートの上でつむつと滑

つた蜘蛛が、慌てて孝之の背によじ登る。「気をつけろ」一巣つくつてねえんだ、巣……」

スクーターのエンジン音が夜に響く。交差点に行き当たり、孝之はヘルメットのバイザーを上げて首を捻る。

「バイクが自殺しようとしたら、おまえ、どうすると思ひ?」

「人間の場合はどうなんだ? ベルやつて自殺する」

「首吊りとか、身投げとか」

「バイクには首がない。身投げはあつら」

「じゃあ海の方か。いや、保険金のことを考えたなら、失踪じゃ駄目なんだ。盗難保障がないんだから、失踪じゃ保険金が降りない。あこつもそれはわかってるはずだ。壊れて発見されないといけない」

「だな。とすると、ガードレールに飛び込むとか、崖から飛び降りるとか……あとは電車と根性

勝負とかな」

孝之はちょっと考えてから、首を振った。

「いや、それはないと思う。あいつ、人に迷惑かけることに漸く過敏なんだ。針路変更にすら仄を遣つてゐるのに、大勢の人が乗つてゐる電車を止めるとか、そんなことはできない」

「なるべく迷惑かけない死に方を選ぶ、か。そつそつとガードレールを凹ませることから避けるかもしんねえな。崖から飛び降りても業者が車体回収に苦労するとか？ あるつてえと」

「廃車買取業者」

「ああ？」

「事故でスクラップになつたバイクを買ひ取つて、部品をリサイクルして儲ける専門業者がある。そこの前で事故れば迷惑にならない。むしろ喜ばれる」

「そこまで氣い違うかよ！」

スクーターのハンドルを、郊外に通じる道の方へ切つた。業者が所有してゐるスクラップ保管の空き地があるのだ。バイクと一緒に一度だけ前を通つたことがある。

アクセルを回しこみ車体を加速させ、冷たい夜の中を走つた。

「どうしてだらつ」

やりきれなくて、呟いた。

「どうしてこんな馬鹿なことするんだらうあいつ」

「おまえの役に立ちてえんだよ」

風の唸りに全身を包まれる。

ぱたぱたとなびくシャツの裏から蜘蛛の声がした。

「おまえに必要としてもらいてえんだ。他にどう生きていいかわからねえのさ。おまえに認めてもらいたいって、それだけを自分の存在価値にしちまつたんだ」

「なんでそこまでオレを？」

「親みたいなものだからや」

「そんなの間違つてゐるだら」

「そつが。間違つてゐるやいろいろ。でもつゝ、認められたいつて思つちまうんだ。子供なんだよ

あいつ。子供だからおまえに認められることでしか、自分を確認できてねえのさ」

連なつた車のライトの光が、次々に視界に飛び込んだ。立ち並んだ信号が一斉に赤を示し始めた。

国道を逸れ、脇に入った。すぐに他に走つてゐる車がなくなる。夜が濃くなつた。

ふと思つた。大学を受ける前に、自分は何故、母に逆らつて専門学校を受けようとしたかったのだろう。言葉にすれば良かつたのに。不満を抑えて、物分り良く分別のある生き方をしてきた

のはどうしてだ。もう大人だと認められたかったのか。自信がなかつたのか。

「なめてるんだよ」

自分の頭の中で、どんな筋道を通りてそんな言葉が出てきたのかわからぬ。今度は蜘蛛は言葉を返さなかつた。

構わず、言葉が勝手に盛り上がり溢れた。

「なんのために買ったか？ 確かに、自分のために買ったさ。あいつのためじゃない孝之は思う。不満なのはなんなのだろうと。

何がこんなにやるせないのか。苛立たしくて仕方ないのか。

「でもそれだけじゃないか。それだけのことだ。自分よりいいバイクが手に入つたら、オレが嬉しいかだつて？ ふざけんなよ。そうやって顔色窺つて遠慮してれば褒められるとでも思つてんのかよ。なめてんだよ。結局あいつ、オレの気持ちをなめてんじゃねえか」

視界が滲む。スピードメーターは上がつていく。道は一直線で信号もない。こんな道ならいつも走れるだろ？

風が逆走してくる道を切り裂いて孝之は走る。暖かい空氣と冷たい空氣の層を交互にぐぐりぬける。夜の中に自分が一人。自分も風になつたように思ひ。

道の脇には田圃が広がつてゐる。視界に次々と現れでは、すぐに後ろに置き去りにならぬ。遠くに一筋の光が見えた。

バイクのライトだ。

道路を右から左に横断するよつて、脇の空き地に向けられている。

思わず孝之はアクセルを握つていていた手を緩めた。伸びたライトの線の元、街灯に照らされてブルーの車体が微かに浮かんで見えた。ライトはためらつて、ちょっとだけ前へ進み、止まつた。戻る。進んでは止まつて、また戻る。さつと、いつも進んだり戻つたりしてばかりなのだ。いいよ、それで、と孝之は思うのだ。

ライトの射す道筋の脇、空き地の中には、夜より濃い暗い影が重なつてゐる。横たわつたバイクの山。バイクの墓場だ。事故か、古くなつて廃車になつたのか、無数のバイクがうず高く積み上げられてゐる。巨大なクレーンが闇の中に釣り下がつてゐる。

ライトの光は、その空き地の奥のブロック塀に、一直線に向けられている。のっぺらぼうの石塀の上に、一体何を見ているのだろうか。

と、バイクが後退した。勢い良く。

道路の端、ぎりぎりまで。

助走の距離をとつたのだ。

追突して、大破するために。

「おー！」

孝之は叫んだ。まだ遠い。エンジンの音も聞こえていないのだ。声が聞こえるわけもない。

「やめろー！」

バイクは気付かない。自分の中の最後のアクセルを開く瞬間に備えて、じつと止まつたままでいる。やめろ、そんなアクセルワーク間違いだばかやろう。孝之は精一杯アクセルを捻る。応えてスクーターが加速する。叫びながら、孝之はホーンスイッチに手を伸ばした。気付くか。無理か。頼むよ。気付け

ロケットの爆音のような大音量に、危うく孝之が転倒しかけた。

「すみません。実は私、改造車なんです」

「くそ、違法だけじよくやつたー！」

道路の上を竜のよう伝わった音が、空気を振動させるのが見える。気付いてライトが、ぴくっと揺れた。おそれおそれと、ひきりを振り向く。

上向いたライトと田があつて眩しい。

「おーい！」

孝之は走りながら叫んだ。

バイクはその場から動かなかつた。孝之に気付くと、微かに首を左右に振つた。ライトがすつと地面上に落ちた。光が弱々しくなつて、暗くなる。

孝之は口を開きかけたが、言葉を準備していなかつた。エンジンの音。風の音。叫ばなければ聞こえない。

何を叫べばいいのだろうか。孝之は叫んだことなどないのに。

一瞬考え、また口を開いた。

「走るの、結構、楽しいぜ！」

俯いていたバイクが、またライトを上げた。

「よー」

バイクの近くでスクーターを止めると、なんとも間の抜けた挨拶をした。うん、とバイクも間抜けの二乗。

走りすぎて加熱したスクーターのエンジンを切る。頬りなさげなバイクの車体が、静かにエンジンを回している音が聞こえた。引き籠もりとは云々、これだけエンジンを回せるのだから心配ない。走れるはずだ。時速200キロくらいで。

「なあ

「うん

「ここへん走ったことなかつたけどわ」

「うん

「他に車いなくて気持ちいいな」

「そつ?」

「ああ。ここにつけ道なり、きっと楽しいぜ。スピード出したじしてや」
黙つているのがなんとなく嫌で、喋り続ける孝之、「バイクはときどき葉を挿もつとする。
「めんとか、迷惑をかけてとか、ちゃんと売られるからとか、なんとか。

孝之はスクーターのホーンスイッチに手をかけた。

至近距離で思い切り鳴らしてやると、バイクはほとんど仰け反った。

「……タカユキ、それ、まずこよお。警察とか来るよお」

「うん。ほんとまずいなこれは。なんなんだこれ」

「ご主人の嗜好は私にもわかりません。見た目わからない改造するのが好きらしい」

「やっぱオレ、バイク狂いの気持ちつてよくわかんないや。走るのは気持ち良かつたけどな。こんなホーンのついたバイクにや乗れないぜ。ただでさえホーンの音つて耳障りだしさ。控えめなくらいでちょうどいい」

な、と言つてバイクを見やると、バイクはおそれおそれのホーンを鳴らしてみせた。氣の抜けたブオンという音が響いた。あのつすみません、という感じの、対人恐怖症仕様の特別ホーンだ。思わず笑つた。素敵な音だと。

バイクも笑つた。エンジンの音がぐるんぐるん高くなつた。ワインカーがかちかち好き勝手明滅した。

「タカユキ」

「今夜はどつか、走つにでも行いつぜ。家飛び出してきて決まり悪こしや」

「うん!」

バイクは激しくライトを上下させた。何やら感極まつた様子で、「めんとありがとうと最早よく聞き取れない言葉を繰り返した。

ぱたぱたと液漏れさせるバイクを見ながら、これはあとで点検に出さないといかんなんと思つた。バイクの涙の成分はよくわからないが、ブレーーキオイルだつたら大変だ。

家に戻つたのは、翌日の早朝だつた。

新聞屋のミニバイクたちに混じつて、家の前でバイクを停車させた。どうもで行つて、どういう道を辿つて帰つてきたのか、よくわからない。

ややあつて、玄関の扉ががちゃりと音を立てた。カギを開ける音がしなかつたのは、カギが閉められていなかつたからだ。扉はずつと、家出息子が戻るのを、息をひそめて待つていたらしい。出てきた母は、ちぐはぐでおかしかつた。孝之の方へ早足になりかけて止まり、手を伸ばしかけて下ろし、口を開きかけて閉じ、顔を崩しかけて眉を顰める。

「ただいま」

孝之が言つと、彼女はちよつと考へてから、黙つて一つだけ頷いた。くるりと背中を返し、家の中に引っ込む。

孝之は笑い、バイクと顔を見合させた。

「またあとでな」

「タカユキ、ここ路上駐車だよー」

「ちよつとだけだよ。すぐ戻る。がつたりやられるのが長引かなけりやね」

玄関をくぐり、ヘルメットを壁に吊るした。グローブを外してカバンに仕舞う。

靴を脱いでいると、気配がした。顔を上げると、母が腕を組んで、唇をひん曲げて孝之を見ていた。

ちらりと玄関の向ひに視線を飛ばし、母は言ひ。

「バイクに乗るなら乗るで、蜘蛛の巣くらい掃除しなさいよ。みつともない。せつかくのタイヤが台無じじゃない。『ザイン事務所に入るのに、そんなんでどうするの』違つよ、と孝之は肩を竦めた。

「蜘蛛の巣つきバイク、これから流行るんだつてば」